

そこから、共通の物語が

竹 内 富久恵

奨励者紹介〔たけうち・ふくえ〕

日本キリスト教団神戸愛生伝道所・北須磨教会牧師

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きて裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。」

（マタイによる福音書 7章1—5節）

変えられるということ

私は神戸にありますが神戸愛生伝道所、それから北須磨教会という二つの教会を兼務しています。本務教会は、神戸愛生伝道所の方なのですが、いわゆる地域の教会ではなくて、神戸愛生園という「障がい」者の人たちが生活する施設で礼拝しているのが、この伝道所です。神戸愛生園は、神戸聖隷福祉事業団という社会福祉法人の施設で、伝道所とは別に施設の礼拝があったり、法人の他施設にも礼拝をしにいたり、ということがあるのですが、働き出して今年で17年目になるということもあって、17年という時の中でさまざまな機会に話をし、また、人間関係をもたせてもらってきた職員さんや利用者さんと話をしたりということも日常的にある中で、いつのまにか自分の何かが変えられている、ということをもとに思わされることがあります。

たとえばこの夏のことです。いわゆるお盆休みというもの、利用者さんがおうちから通って来られる型の施設にはあたりしますが、今年の夏、そのお盆休みの最中のことでした。私の生活の場所兼仕事場は、神戸愛生園の隣の施設の2階にあるのですが、午前中、今日のお話のような、礼拝でのお話の準備をするのに、パソコンで文章を打ち込みながら、なんか違うなあ、何かさみしい感じがするなあ、何かと考えていて、ああ、今日、静かなんだ、利用者さんたちの声が聴こえない、だから何かさみしいんだ、って思ったんですね。

敷地内には三つの施設があり、その中に「知的障がい」者の人たちが通って来られている施設があるのですが、その人たちがお休みで不在だったから、いつも聴こえる声が全くせず、あれ？という具合に感じられたのです。けれども正直に言うと、17年前は、利用者さんの、「ほー」とか「きゃー」とかいう声が聴こえると、それが気になって、なかなか集中して文章を書いたりできない。もっとはっきり言えば、仕事の邪魔だなあ、なんていうとんでもないことを思うことができました。それがいつの間にか、そんなふうになっていたことすらすっかり忘れて、むしろ、静かだな、寂しいな、何でだろう。そうか、声が聴こえないからさみしいんだ、と思うようになっていた……そのことに気づきました。それも私が変わらなきゃ、と思ったからでは

なくて、17年の時間と、その時間の中でたくさんの人と顔をあわせる機会をたくさんたくさんもらってきたこと、その中で変えてもらったことがわかって、ああ、私、あのままじゃなくてよかった、と、その時ものすごくほっとしたのです。

滋賀県の「止揚学園」で、食事の時、誰かが急に「平和ってどういうこと」と質問をした。一瞬、皆が困ったような顔をし、シーンと静まりかえってしまった。その時、ある方がニコニコ笑いながら「わたし、知ってる。みんな一緒に、ご飯を食べることや」と大きな声でお答えになった、という話をご存知の方もいるかと思います。みんな一緒にご飯を食べられる、それは、みんな今日ごはんが食べられる、みんな生きられるという意味でもあるし、一つのテーブルに座って何かを共有しながら、そこにいっしょにしていることができる、ということでもあるだろうと思います。けれども、私たちの暮らす社会は、そういう豊かさがすみずみにまでいきわたっているようなところではありません。私は食べられる、でもあなたは食べられない、という状況がある。あるいはあなたとはいっしょのテーブルにつく、でもあなたとはつかない、というような「分け隔て」も厳然と存在しています。けれどもそれは他人事ではなく、利用者さんの声が聴こえると、それが気になって、なかなか集中して文章を書いたりできないな、と私が思っていたのも本質的にはそういうことだ、同じことだと考えさせられながら、そのような私を変えてもらったということが、どれほどかけがえのないことなのか、ということをお考えされるのです。

あの事件の中で

昨年、神奈川県相模原市で起こった、施設の元職員が、施設に入居しておられる「障がい」者を殺傷したという事件のことは皆さんも強く記憶されていると思いますが、事件そのものも、そして動機として報道されたことの中身も、また報道の中での精神疾患への偏見の助長も、あらゆることにショックを受けうろたえたこと、今もまだ自分の中で「おさまって」はいません。その意味ではまだ何もちゃんと整理できてはいないのですが、自分の知っている人たちの顔を浮かべ、利用者さんや職員、家族のご様子が気になり、さまざまなことを考える中で、最も違和感を強く覚えたのは、善意の第三者のようにしていられる自分を含めた、周辺、社会を形成する一人ひとりのあり方や問題意識、問いの無さ、というものだった、と言えるかと思います。当初、被害者の全員が、A子さん19歳、といったかたちの匿名で報じられました。昨年12月になってから、警察は家族の了承が取れたとして、被害者2人の実名を初めて公表しましたが、その実名が公表されたうちのお1人である尾野一矢さんという方、この方は退院されて今別の施設におられるそうなのですが、その尾野一矢さんのお父さんは、県警がこれまで息子の名前を発表しなかったことについては疑問を感じてきたとその際仰っていました。現在、実名か匿名かの判断は警察に委ねられることになっており、家族の意向があっても、警察が判断すれば実名で発表されるということになっています。ですから、警察は家族の了解が取れたから、と言っているけれども、少なくともこの矢野さんという方については家族の了解の問題ではなく、警察が発表しないという判断をしていたことがわかるかと思います。一方で、匿名を望む家族がおられることも確かです。

ではなぜ、警察が名前を出さないと判断したり、家族が匿名を望むのか。一言で言えば、社会差別があるから、です。もちろん、一方的で強引な取材と報道という問題があります。ご家族の気持ちを尊重する、ということの重さもあります。しかしそれで終わらせられないことがその奥底にはあるのではないかと私

は思い続けています。なぜその人がその人であるということをあらわす名前が消えて、性別と年齢のみが発表されるのか、ということ、警察や家族、マスコミ、といった「私・自分」ではないものを理由にして語り終わらせていくことはできない、と思うのです。

昨年9月14日の『毎日新聞』に掲載されていたのですが、取材をした記者の方が「記者の目」という欄に、このようなことを書いておられました。全文ではありませんが、一部をそのままお読みします。

事件発生から1カ月近くたったころ、ある遺族がようやく語ってくれた言葉が今も胸に突き刺さっている。「障害者への偏見と差別は誰にでもある。家族は『かわいそう』と同情されるのもつらい。家族に障害者がいることを周囲に言わなければ、余計な気苦労をしなくていいから」。別の遺族は「親類ですら、一緒に食事するのを嫌がった。施設に面会に行くとあげてと頼んでも、誰一人面会には行ってくれなかった」と明かした。この人は命を奪われた家族との、かつての楽しい思い出を懐かしみつつも「事件がなければ、周囲に隠し通せたのに」と目を伏せた。親族にすら疎まれた障害者、その存在をオープンにできない家族……。そうした人たちがいる現実と直面した時、「社会に伝えるために実名で報道させてほしい」とはとても言い出せなかった。

そして、記者さんはこうも述べておられました。

では自分に差別する心はないと胸を張れるかと問われると、自信はない。街で障害者に会ってもどう接していいかわからず、無意識に距離を置いたことが何度かある。障害者や家族の目には、それが差別と映ったかもしれない。取材で出会った遺族たちは「顔の表情や声のトーン、ちょっとした仕草……。言葉は分からなくても気持ちは伝わる」と口をそろえた。果たして自分はどれだけ障害者と正面から向き合い、その家族の思いに耳を傾けてきただろうか。

この記事を読みながら、私は、利用者さんの声ができることを邪魔なものであるかのように感じていた自分が、確かにそのことについては変えられたと思うけれど、そんな自分が全くいなくなったのかと言えばそうではない、ということ、具体的な場面を思い返しながら反芻するようにして考えさせられたことでした。

たとえば、利用者の方で、何かいやなことや悲しいことがあると、私のところに来て「はなちきいて」と言われる方があります。私はその人のことを、人の都合も、人のこともおかまいなしの人なのだ、と判断していました。他の人と話をしている時、今からすぐ出かけなければならないと上着を着、靴を履いている時であっても、自分が話を聞いてほしいと思ったら「はなちきいて」と言って来られ、今は時間がないから後で、と約束しようとしても、絶対今じゃないとダメと泣く。そういう方だから、と。そして、この方の発達の状態からすれば、それがその人にとってはあたりまえのことであり、この人の特性なのだというふうに片付けていたのです。

それが、ある日、私がかんりの睡眠不足でしんどかった日に、「はなち」といつものように仰って、車椅子を操作しながら、近づいて来られた時がありました。ああ今日はしんどいなあ、でも、そんなん言うたらあかんなあ、というような気持ちで、「なんでしょうか？」と私は返事をしました。その日はくまもしわもいつもより一段と深く、なかなか無残な顔をしていたのですが、私は、その方が、そんな私の様子を気にして下さるとは全く思っていなかったのです。ところが、私が予想してなかった反応をその人がされたんですね。「どうしたん？ ひどい顔」とおっしゃって、私をきゅっとハグして下さった。その方のぬくもりを感じながら、私が思ったのは、ああ私、ひどすぎる、私、なんてひどいだろう、ということでした。

この方の発達の状態からすればそれがその人にとってはあたりまえのこと。この人の特性なのだ。そんなふうに、一見、理解しているような物言いでもって、私はこの人を勝手に、一方的に判断するという、極めて傲慢なことをやっていたのだと。そういったことが相変わらず自分の中にある根深い、根深い差別性なのであって、そういう私も、この記者さんと同じ問いの中に晒されなければおかしいのだと思うのです。そしてその問いに留まることのないまま、私がこの事件を他者化して論じることなどできない。それは、私だけではなく、おそらく誰もが、この事件につながる責任者の一人として、正面から向き合うことが必要なことなのではないか。そのようにも思っています。

反対側から自分を眺める

もう3年半前のものになりますが、京都大学総長の山極壽一さんが書いておられた「作り手による『物語』」と題した論考に、芥川龍之介の書いた『桃太郎』のことが触れられていました。このような書き出しです。

芥川龍之介の作品に『桃太郎』という短編がある。桃太郎がサル、イヌ、キジを連れて鬼が島に征伐に行く有名な昔話を鬼の側から描いた話だ。豊かで平和な暮らしを突然たたきつぶされた鬼たちがおそろおそろ、何か自分たちが人間に悪さをしたのかと尋ねる。すると桃太郎は、日本一の桃太郎が家来を召し抱えたため、何より鬼を征伐したいがために来たのだと答える。鬼たちは自分たちが征伐される理由がさっぱりわからないままに皆殺しにされてしまうのである。

そして山極さんは、「笑い話ではない。つい最近まで、いや現在でもこれと同じことが起きていないだろうか」と続けておられます。実際の小説では、皆殺しではなく、生き残った鬼たちがいるのですが、その鬼たちは時々海を渡って来ては、桃太郎の屋形へ火をつけたり、桃太郎の寝首をかこうとするんですね。しかし桃太郎は「どうも鬼というものの執念の深いのは困ったものだ」とため息をつき、それを聞いた犬も「やっと命を助けて頂いた御主人の大恩さえ忘れるとは怪しからぬ奴等でございます」と言うなど、桃太郎側に自分たちを省みる様子は全く見当たりません。そしてその間も、寂しい鬼が島の磯には、美しい熱帯の月明かりを浴びた鬼の若者が五、六人、鬼が島の独立を計画するため、椰子の実に爆弾を仕込んでいたといったことが描かれたあと、人間の知らない山の奥に、桃太郎の桃の実をつけていた桃の木には、まだ無数の実がついていて、未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らず眠っている、という情景が描かれて終わっていくので、本当に笑い話ではなく、繰り返されている、繰り返されようとしていることなのだ、となお一層思わされます。

山極さんも、ゴリラが19世紀にアフリカの奥地で欧米人に発見されて以来、好戦的で凶悪な動物と見なされてきたこと。その物語が、アフリカを暗黒大陸、ジャングルを悪の巣窟と見なしたがった欧米人の幻想であり、欧米各国がアフリカに植民する格好の理由だったことを述べたあと、今もこうした誤解に満ちた物語が繰り返して作られているんじゃないか、と続けておられました。そして、どちらの側にいる人間もその話を真に受け、反対側に行って自分たちを眺めてみることをしないじゃないか、と。

私には、この「反対側に行って自分たちを眺めてみることをしない」という言葉が強く残りました。しばしば「相手の立場に立って考える」ということが言われますけれども、山極さんの仰っている「反対側に行って自分たちを眺めてみる」というのは、相手の立場に立つということにはとどまらない話です。更にそこか

ら自分というものを見つめ直す、とらえ直す、ということでもある。そう考えながら、なるほどそうか、相手の立場に立って考えましょう、で終わってしまうのではないのだ。更にその反対側から自分を見つめ直してみる、とらえ直してみる、そのことなしに、一方的な物語じゃない、共通の物語のそれぞれ違う登場人物として生きるということにははじまっていけないのだ、と気づかされた思いがしたことでした。「どうも鬼というものの執念の深いのは困ったものだ」「やっと命を助けて頂いた御主人の大恩さえ忘れるとは怪しからぬ奴等でございます」と言っている桃太郎にも犬にも、「反対側に行って自分たちを眺めてみる」、そこから自分というものを見つめ直す、とらえ直すという姿勢は全く感じられません。けれども、桃太郎たちがそこに留まり続ける限り、鬼は次の手を準備し、桃の木の花は、いつしか流れていくときに向かって待機を続けていくまま、になってしまうのです。

一方的な物語ではなく

さて今日読んだ聖書の冒頭には「人を裁くな」とありました。ここで「裁く」と訳されているギリシャ語は「クリノー」という言葉なのですが、新約聖書で、このクリノーという言葉は、かなりたくさんの翻訳ができる言葉で、実際、新約聖書ではいくつもの違う言葉で翻訳がなされています。ではこのクリノーにどんな意味があるのかと言えば、判断する、告訴する、有罪を宣告する、評価する、最終的な罪に定める等の意味と共に、分離する、区別する、分け隔てる、差別するといった意味があります。それらの全体を受け止めて「人を裁くな」という言葉を考えてみると、自分とは分けて、決めつけて、評価して、最終的な罪に定める、ということが裁くということなのだということが理解できるだろうと思います。まさに、山極さんが仰っていた、一方的な物語がそうであり、利用者さんの声をうるさいと思っていた私も、この人はこういう人だと決めつけていた私が、そうなのだと思います。裁く者になっている。けれどもその時、自分の目にある丸太には気づいていない、と言うのです。そんなごっつい丸太ならば気づきそうなものなのに、しかし気づいていない。それは、今日お話しさせていただいたことの中から言うならば、一見、理解しているような物言いであって、人を勝手に判断するという、極めて傲慢なことをやっていたことを、私が自覚できていなかった、ということと重なります。

また、そういった根深い自身の差別性を問うことのないまま、相模原市での事件の加害者の思想として伝えられるものを他者化して批判し論じたり、被害者が匿名で報道されることを、家族の思いを理由にして、その背後にある社会差別とその社会の一員である自分自身の抜き差しならなさを考えていこうとしないことの中にも、その丸太はあるのだと思います。

私も同じ問いに晒されている責任者の一人であるのではないかと留まってみることをしない、自覚せず向き合うことをしない、そういうところに、自分の目にあるごっつい丸太には気づいていない、人のありようが浮かびあがってくるように思うのです。そしてそのような人間に、「人を裁くな」「まずは自分の目の中の丸太を取り除け」と語られていることをちゃんと聴いていきたいと思っています。自分の丸太を取り除いてはじめて、相手のおが屑を取り除ける、それはそうしてはじめて、お互いにかかわりあって了解しあって生きていけるようになるのではないかと、という語りかけであり、また促しであるのだと思うからです。

相手の立場に立って考えましょう、で終わるのではなく、向こう側、相手側から自分を見つめ直してみる、とらえ直してみる。そこから一方的な物語じゃない、共通の物語を生きるということ、共通の物語のそれぞ

れ違う登場人物として生きるということがやっとはじまっていくのかもしれない。そのように今日の聖書の言葉を聴いていきたいと思います。

2017年1月11日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録